

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 本間 和宏

学科名・専攻名 農芸化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	R2 年度からの新カリキュラム 4 年生開講を踏まえ、時間割の見直しを行った。	1 年の農芸化学演習および 3 年の研究室演習においてアクティブラーニングを行って、必修科目学習の動機づけを促進している。 GPA が低い学生への個別指導を行った。	期末の評価期限前には不合格判定について学科内で情報を共有するとともに、評価責任者による不公平が生じないよう、学科会議で随時申し合わせを行っている。	各研究室内での卒論発表会、および学科全体での代表発表会を通じて、学位授与方針を満たしているかどうかの判断に大きな差が生じないようにしている。	大学が指定したアンケートを実施し、その結果にもとづき各教員が改善を行っている。 2020 年 3 月 20 日に学科独自アンケートを実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】 学問の出口を意識させることができる。	【長所】	【長所】	【長所】 大部分の学生が研究室活動の内容を高く評価し、有意義なものであったと考えている。
	【特色】	【特色】 作物栽培からその加工・消費までの過程を実体験し、その背景にある理論について学生自身が課題を設定して学ぶ。	【特色】	【特色】	【特色】 大学指定の卒業時アンケートでは、本学科が力を入れている研究室活動に対する学生の評価が分からないので、学科独自アンケートは有効である。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】 人数が多く、時間割内で行う必要があるため、学生にやらせることができない作業を教員がやらざるを得ない。	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】 限られた期間内に完結するような内容を検討する。	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名		添付資料「R1 化学・基礎的点検評価・添付資料 1 __1 年共通演習」を参照 添付資料「R1 化学・基礎的点検評価・添付資料 2 __3 年研究室演習」 添付資料「R1 化学・基礎的点検評価・添付資料 3 __個別指導」を参照。		添付資料「R1 化学基礎的点検評価・添付資料 4 __卒論発表」を参照。	添付資料「R1 化学基礎的点検評価・添付資料 5 __卒業時アンケート」を参照。

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	入試センターからの提案を学科会議で教員に周知し、それにもとづいて入試を実施した。	高校出張講義を積極的に行って、ミスマッチを避けるように努めた。 R1 年度前期に食と農の博物館で農芸化学展を実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】 農芸化学展の期間中、4 6, 9 9 5 人の来場者があった。講演会やトークショーを 4 回行い、いずれも盛況であった。
	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】 子供とその親と思われる来場者が多かったので、成果の検証は今後数年にわたって行っていく必要がある（どこで農芸化学科を知ったか、などのアンケートの実施）。
根拠資料名		添付資料「R1 化学基礎的点検評価・添付資料 6 __高校出張講義実績」を参照。 添付資料「R1 化学基礎的点検評価・添付資料 7 __農芸化学企画展実施」を参照。

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明		各研究室に必要な人数の教員が在籍しており、各教員の専門分野も学科の専門性に沿っている。	学科教授会を随時開催し、募集、採用、昇任の方針について共通認識を形成している。	1年生の農芸化学演習・共通演習における実習に全教員が参加した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】 イネの栽培からコメの利用までを学生に解説しながら作業を実施することで、「農芸化学」の一員であることを認識する。	【長所】
	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】	【課題】
根拠資料名				添付資料「R1 化学・基礎的点検評価・添付資料 1 __1 年共通演習」を参照。	

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 本間 和宏

学科名・専攻名 醸造科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づき、基礎的基盤的知識の習得に関わる科目を初年次及び2年次に重点的に配当し、3年次では応用的な科目を、4年次ではそれらを統合した卒業論文を必修科目として配当することで、段階的、体系的に学べるように教育課程を編成・実施している。	1 年生のフレッシュマンセミナーにおいては、3 つのポリシーを説明する時間を設けているほか、学習目的を明確にする工夫を講じている。また、教育効果をあげるために、インターンシップ型の実習を基礎と応用を十分に学び終えた3年次後期に配当している。	入学時に1年生全員に対し、進級・卒業要件を明示している。各教員がシラバス記載の成績評価基準に則り、適切に単位を認定している。学位授与については、学科教員会で審査を行い、全員一致をもって授与の可否を決定している。	卒業年次学生に対して、学生調査を実施することで、学生のディプロマ・ポリシーへの達成度を把握、評価している。また、定期的に学生の GPA を把握することで、GPA が低い学生について個別の指導を実施している。さらに、学生対象の授業評価アンケートを元に授業の改善を行っている。	カリキュラム委員会において時間割編成の適切性について検討を行っている。卒業年次学生に対して行う学生調査の回答結果から、教育課程の内容と方法がディプロマ・ポリシーを達成するために適切であったかを点検することで、教育課程の内容・方法の適切性の評価を行なっている。また、各学年の GPA 分布の形状や平均・ばらつきから、教育課程の内容と方法が適切であるかを確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】学生の社会的及び職業的自立を図るために、3年次にインターンシップ型の実習科目を取り入れている。	【長所】企業や公的機関とのつながりを生かし、学習状況に応じて実産業について学ぶ機会を設けている。	【長所】適切に成績評価、単位認定を実施している。	【長所】学科のディプロマ・ポリシーが明解であるため、学生調査に基づいた学生の学修成果を把握しやすい。	【長所】全学生についての GPA データは、大学から毎年決まった時期に開示されることから、定期的な点検が実施できている。
	【特色】最終学年の卒業論文を必修科目として位置付けることで、3年次までの学習内容を統合して理解できるように配慮している。	【特色】専門性が高い学科のため、学生の目的意識が強く、関連企業の講演などにより、効果的に学生の修学意欲を活性化できている。	【特色】なし	【特色】同上	【特色】GPA 分布は全ての学年で毎年算出している指数であるため、客観性があり、学科間や学年間での比較も行える。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】教育内容を段階的に設定しているものの、初年次学生の基礎学力に幅があるため、特に化学系科目において、理解不足のまま進級する学生がいる。	【問題点】必修科目では、授業履修学生数が150人を超えるため、学生全員に均質な学修意欲を持たせる工夫が難しい。	【問題点】なし	【問題点】1, 2, 3年次においては、GPA 以外の学修成果の把握は充分ではない。	【問題点】現時点では、学生調査の結果を個々の教員の授業改善等に全面的には生かし切れていない。
	【課題】入学後の教育において基礎的項目についてフォローする体系的なサポートを行うことが望ましい。	【課題】上記問題点について、引き続き工夫する必要がある。	【課題】なし	【課題】高学年での学修の基盤として必要となる、低学年次の化学・生物系基礎科目の学習成果を正確に把握する方法を検討する必要がある。	【課題】学生調査の結果において、ポイントが低かった項目について、教員が改善する意識を持つよう周知する必要がある。また、GPA 以外の客観的な学習成果の評価方法を模索する必要がある。
根拠資料名		資料1 フレッシュマンセミナー予定表			

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学科のアドミッションポリシーに基づいた内容で高校生に対する情報発信を行い、学生募集を行なった。大学の定めた入学者選抜制度の枠組みの中で、アドミッションポリシーに則った入学者の選別を行なうため、学科内に基準を設定し、それに基づいて公平・適切な選抜を行なった。いずれの型の入試においても、学科教員全員による厳正な審査により、可否の判定を行なった。	毎年年度始めに、本学科在籍者全員の学籍データ（入試制度・GPA 記載のもの）を教員全員で共有し、入試制度および学生受け入れの適切性について点検・検証を行なって、次年度の入学者選抜の際に生かしている。また、本年度は、新入生に対してアンケートを実施し、募集や学生受け入れの適切性について点検・評価を行なった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 将来、酒類・食品製造・環境浄化、エネルギー開発等の微生物利用産業の発展に寄与する意欲を持つ学生を、色々な側面から広く集めることができている。	【長所】 カラーのはっきりした学科であるため、学生の傾向を把握しやすい。
	【特色】 醸造科学に興味・関心をもつ学生のみならず、実際の醸造業の後継者の受け入れに成功している。	【特色】 学生の志向の面からは、受け入れは概ね適切に行なわれていると考えられる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 入試制度が多岐に亘るため、本学科アドミッションポリシー（1）の項目について若干不適合の学生が一部発生している。	【問題点】 入試制度が多岐に亘るため、学科の方向性と学生の志向とのマッチングは概ね良いものの、学生間の学力のバラツキが若干大きめの傾向がある。
	【課題】 大学入学後のリメディアル教育等を充実させ、入学後の就学に支障をきたさないようにする必要がある。	【課題】 入試制度にかかわらず、本学科のカリキュラムおよびディプロマポリシーに対応できる学生を入学させる努力と工夫が必要である。
根拠資料名		資料 2 (新入生アンケートおよびアンケート集計結果)

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の方針に則り、学科の教員組織の編成に関する方針を明示している。	現在の教員配置は、完全に方針を反映した形となっている。	本学科は研究室ごとに明確な醸造の対応業界を持ち、一研究室3名の教員構成（年齢・職階的なバランスも考慮）となるよう、随時適切な募集・採用・昇任を行なっている。この方針および大学の人事方針に則り、本年度も新規採用教員の募集を行なった。	FD について説明会を設け、研鑽を積んだ。 醸造食品部会での活動を通じて、企業等との連携を図るとともに、教員の資質向上も図った。	本年度から6研究室体制で活動を行なった。新6研究室体制となるにあたり、学科の教員組織の適切性について検証を行なった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 編成方針と齟齬がなく、学界・業界の双方に対応可能な教員配置となっている。	【長所】 教員組織の編成方針が明解なため、募集の際の条件も明確である。	【長所】 学科の方向性が明解であるため、資質の向上を図る機会を設けやすい。	【長所】 なし
	【特色】 教員組織の編成方針が明瞭である。	【特色】 国内でも数少ない発酵・醸造専門の研究・教育機関として機能することが可能な教員配置となっている。	【特色】 なし	【特色】 伝統／先端、教育／研究、産／学のバランスのとれた学科活動に向けての研鑽を行なっている。	【特色】 醸造科学分野において、より効果的な教育・研究を実践できる教員組織となることが予想される。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 今年度は適任者がいなかった	【問題点】 学科として目指すものが多く、ややもすると教員のオーバーワークに繋がってしまう。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 醸造微生物、醸造技術、醸造環境学分野の若手教員1名ずつ合計3名を採用するため2020年度公募する必要がある。	【課題】 一部の教員に負担が集中しないように、教員配置に沿って、全員が業務を適切に分担する。	【課題】 なし
根拠資料名	資料3 農大ホームページ URL https://www.nodai.ac.jp/about/guide/policy/04/			資料4 総研研究会醸造食品部会総会および講演会開催のご案内	

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 本間 和宏

学科名・専攻名 食品安全健康学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	3 年次生、4 年次生は平成 26 年に開設した当学科の現カリキュラムは文部科学省に届け出たものであり、カリキュラムポリシーに則って、食品の安全性と機能性について両方を十分に学べる編成になっている。一方、1 年次生、2 年次生は、カリキュラムポリシーは同様であるが、科目間の連携と専門性を検討した新カリキュラムを施行している。初年次教育としてフレッシュマンセミナー、食品安全健康学概論を設け、大学生活および授業の概要に接する機会を設ける工夫を行っている。また、高大接続を配慮し、特に当学科に必要な科目である生物学と化学の基礎科目を設置している。社会的及び職業的自立を図る科目として、キャリアデザイン、インターンシップ、ビジネスマナーを設けた。	1 年間及び各学期に履修登録できる単位数をそれぞれ 49 単位、25 単位と設定し、各科目を十分に予習、復習ができるようにしている。シラバスには、授業の目的、到達目標、取り扱う領域、各回で行う内容及び準備をしておくべきこと、学んだことが活用できる領域、評価の方法等を記載し、学生の学習を活性化できるようにしている。 学習量が多い科目に関しては、適宜中間試験を設け、中途における習熟度を確認している。また、小テストなどにより前回学んだ項目について、各自理解度を確認させている科目を設けている。 今年度から、知識を活用して課題を解決する力（リテラシー）と経験を積むことで身についた行動特性（コンピテンシー）を 1 年次と 3 年次に測定し、各学生の成長度を目で見えるようにする試みを行った。	単位制度および学位授与は、1 年次に学生全員に配布する学生ハンドブックに記載し、入学オリエンテーションにて学生に周知している。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。卒業論文審査は、学科各研究室において、研究室全教員出席のもと、卒業論文発表会を行い、審査した。	「フレッシュマンセミナー」における出席状況は 99%であり、また S~C 評価だった学生は 100%だった。また「食品安全健康学概論」の S~C 評価だった学生は 97.6%だった。このことから、学生へのディプロマ・ポリシーは概ね周知できたと考える。配当基礎科目における単位取得率は、どの科目も 85%以上であり、基礎科目の平均 96.8%、専門コア科目 96.2%であった。(資料 1) また、GPA が低い学生には、後期に担任と個別に指導を行った。	各科目において、学期末に学生アンケートを実施し、その結果を各教員に配布され、次年度以降の授業に役立てるようにしている。 平成 26 年に開設し、4 年間経過した学年の学習成果を鑑みて、1 年次生、2 年次生では新カリキュラムで施行した。成果の評価は来年度まで経年経過を追う必要があるが、化学の習熟度をさらに増すために、化学および化学演習を新たに設け、理論と演習により基礎知識の定着に取り組んだ。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 リテラシーとコンピテンシーを入学時と就職活動前に測定し、各学生に身につけているものと不足しているものを理解させ、今後の学習に対してモチベーションを上げられるようにした。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし

	【特色】 1 年次生と 2 年次生の新カリキュラムおよび 3 年次生以上の旧カリキュラムともに、食品に関して、基礎から応用まで幅広く学べる編成になっている。また、食品に関する研究に必要な生化学、分子生物学などの最先端の学問も教授した。	【特色】 学習量が多い授業に関しては、中間テストを設けるなど、前回学んだ項目を確認させるための小テストを実施した。	【特色】 なし	【特色】 座学の理解度、学生実験の習熟度について数値で把握できた。	【特色】 平成 26 年に設けたカリキュラムを改正し、化学の習熟度を上げるカリキュラムにした。
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 化学を十分に学んでいない学生が多い。	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 新カリキュラムでは、化学の基礎から学べる科目を用意したが、その科目の連携を検討することが求められる。	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 今後のカリキュラム改変において、学生アンケートから問題点を探し出し、改善を図ることが必要と考える。	【課題】 新カリキュラムの問題点を洗い出すため、数年間は学生の士熟度に注意しながら学科の特徴を際立たせるカリキュラムを作成していく必要があると考えられる。
根拠資料名				資料 1 各科目の単位取得率	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	入試センターとともに、ホームページ、大学案内等にてアドミッション・ポリシーを公開している。学科、大学において、入試センターの指導のもと、入学者選抜会議を開催し、入学者選抜を行っている。	毎年、入試センターとともに、一般推薦入試、一般入試、センター入試、指定校推薦の定員等について、全教員で点検、検討している。その結果を大学に提出し、承認を得ている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 今後、偏差値の向上および入学者のレベル向上を目指すにあたり、さらなる少子化を迎えることになるので、入試制度による入学者割合をどのようにするか、入試センターとともに考慮することが必要と考える。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学科の教員組織の編成方針を作成し、大学、応用生物科学部の教育編成方針を踏まえ、本学科の専門性である「食の安全」と「食の健康機能」に関する能力、教育に対する姿勢を明示している。	当学科の専任教員数は 17 名（うち女性 5 名）となっている。また、専任教員 1 名の公募による新規採用により、組織の補強を達成した。生化学、食品化学、微生物学等、教育上主要と認められる授業科目においてはほとんど専任教員が担当している。教員が担当する授業数は、年間 15 時間前後としており、適切な配慮がなされている。10,20 年後の学科を考慮し、学科、各研究室の教員の年齢はバランスよく構成されている。	教員の職位ごとの募集、採用、昇任等は、学則に則って行っている。本年度は、学則に従い、食品安全解析学研究室の助教(任期制)の申請、公募、1 次選考（書類審査）、2 次選考（面接）を行い、1 名の採用を学則に従い行った。	大学で開催されるファカルティ・ディベロップメントの講演に学科の多くの教員が積極的に参加した。また、学生課が主催するハラスメント講習会にも多くの教員が参加している。	毎年度末に行われる各教員の自己点検を全教員が行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 本間 和宏

学科名・専攻名 栄養科学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム・ポリシーに基づいた授業科目を設置している。カリキュラム編成時には、学科教員会の下にワーキンググループを作成し、カリキュラム・ポリシーに沿った授業体系の編成を目指している。	フレッシュマンセミナー（1年次）や栄養科学特論（3年次）などの科目において、地域・産業界・官庁等で活躍している社会人による講演を行い、学生の学習意欲の動機付けにしている。	大学の評価基準に則り、単位認定を行っている。	栄養科学科のディプロマ・ポリシーをフレッシュマンセミナー（1年次）で説明している。また、各授業においても再度確認を行い、学生への意識付けを行っている。また、4年次に総合演習（一）（二）を開講し、4年間の総合学習を行っている。	授業評価アンケートを行い、授業内容の妥当性の把握と次年度に向けた改善を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 本学科が目指す管理栄養士像を教員間で共有し、各教員が担当科目の役割を意識して教育することができる。	【長所】 管理栄養士の活躍状況を知ることで、自らの卒業後をイメージしやすくなり、学習意欲の向上につながる。	【長所】 評価の基準点が明確であり、目標を持って取り組むことが出来る。	【長所】 学習意欲を高く保つことは管理栄養士国家試験に合格するために必須である。	【長所】 資格教育を行いつつ、学生のニーズを取り入れた授業を実施することを教員が意識できる。
	【特色】 厚生労働省が示す科目体系に、本学科が目指す農学、医学などの特色を加えた授業体系を編成している。	【特色】 病院や施設のみならず、様々な分野で活躍している管理栄養士の講演を行っている。	【特色】 国家試験受験資格を得るため、必要な単位数は多いものの、合格基準を明確にすることで着実にこなす意欲につながる。	【特色】 卒業時に管理栄養士国家試験を受験するため、学習成果が教員および学生にとって明確である。	【特色】 管理栄養士養成課程であるため、科目間のつながりが深く、一つの教科の改善が他教科にも影響する。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、各入学者選抜試験を行っている、合否判定会議は学科教員会で決定している。	入学定員に対する入学者数で判断している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 アドミッション・ポリシーに基づいて入学者選抜を適切に行うことは、卒業時に国家試験に合格し、社会で活躍できる管理栄養士の輩出に直結する。	【長所】 適正な入学定員数を維持できる。
	【特色】	【特色】 適正な入学定員数を維持することにより、適切な授業運営ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 入試制度が多岐にわたるため、本学科のアドミッション・ポリシーに必ずしも適合しない学生が若干名いる。	【問題点】 なし
	【課題】 入試制度に関わらず、管理栄養士国家試験合格を全員が目指すよう入学早期から指導する必要がある。 大学入学後のリメディアル教育等を充実させ、入学後の就学に支障をきたさないようにする必要がある。	【課題】 なし
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	栄養科学科の教育研究目標に対して、各専門分野の教育研究に必要な専門性の高い教員の採用とその編成について方針を明定している。	栄養科学科の教育研究目標を達成するための専門性の高い教員組織の編成を行っている。	教員の募集、採用にあたっては、教育研究目標を達成するための専門性の高い教員募集、採用を行っている。昇任にあたっては、大学基準に則り、適切に行っている。	FD の組織的な実施を行っている。	適宜、行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 管理栄養士養成に必要な科目は多岐にわたるが、分野ごとに専門性を明示することで教育・研究の質向上にもつながっている。	【長所】 研究室内で教員同士の成長を促すことはもちろん、専門の異なる研究室間でも資格養成という教育目標を共有して互いに教育・研究の質向上に影響を与えている。	【長所】 就業年数ではなく研究業績や授業の担当状況などが昇格に影響することは、教員のモチベーションの向上につながる。	【長所】 組織的に FD 活動を行うことで、本学科が目指す管理栄養士像を共有しながら改善に取り組むことが出来る。	【長所】 管理栄養士養成に必要な教育を再確認できる。
	【特色】 人間栄養学分野と食品栄養学分野に大きく分類している。	【特色】 研究室は専門分野に分かれているが、1 年次の導入科目や4年次の総合科目は全研究室で受け持っている。	【特色】 採用に当たっては、特に管理栄養士養成に対する考えや意欲、科学的根拠を発信する研究力を重視している。	【特色】 教育の成果が管理栄養士国家試験の合格率として明確に現れる。	【特色】 質の高い管理栄養士養成ができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 学生の学力に幅があるため、国家試験対策が教員のオーバーワークに繋がってしまう。	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 一部の教員に負担が集中しないように、研究室担当教員も学生の試験対策指導にあたり、全員が業務を適切に分担する。	【課題】 なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学部

学部長・研究科委員長名 本間 和宏

学科名・専攻名 バイオサイエンス学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	基礎的・基盤的知識の修得と生命科学に係る実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の 3 つの科目区分に授業科目を配当し、さらに、これらを細分化することによって効果的な学修を行っている。また、修得した知識と技術から専門性の高い卒業論文研究に導くための科目も配当している。	全学年に渡り学業不振者には担任が面談し、学習指導を実施している。基準となる年間最低修得単位数を設定することで、学年による習得単位数に偏りがないようにしている。授業アンケートを実施し、教員にフィードバックしている。全学 FD 委員会での議論等を通し、定期的に効果的なカリキュラム改正を行っている。	講義履修生には、事前に評価方法を明示し、試験またはレポートを客観的に点数化することにより、公平性かつ適正性を確保している。学科での卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与している。	卒論中間発表ならびに卒業論文審査を、複数の教員により行い、学生のディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価している。	教育課程の編成や実施方針の適切性については、適宜、学科所属の全教員により、学科会議において慎重に議論され決定されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 早い段階から実験実習をとおして、実践的な専門知識・技術を修得する。	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】 実習科目を多く配当している。	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	シラバス	指導報告書	シラバス	中間発表要旨集、卒論発表要旨集	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	現 3・4 年生の入試時には、アドミッション・ポリシーに基づき、生命科学に関する強い関心を持ち、食料、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めた。学生が入学するにあたり必要な知識については、入試科目として示していた。これらは入試要項、大学ホームページ等に記載していた。また一般入試やセンター試験利用入試といった筆記試験による選抜方法の他に推薦入試、社会人入試、外国人入試等を設定していた。推薦入試では小論文と面接を行うことで、学力のみならず、生命科学に関する問題意識や論理的思考、多様な人々との協調性を持った学生の受け入れを行っていた。また、学科長を中心とした学科教員による入試判定委員会により合否判定を行うことで公平かつ客観的な入学者選抜を実施していた。	各入試制度別の入学者数の把握を行うことでアドミッション・ポリシーに基づいた入試制度が機能しているか点検を行っている。特に指定校推薦入試については、入学後の学生の成績や推薦状況に応じて指定校の検討を行ってきた。また、公募制推薦入試に関しても面接において基礎学力を評価できる方法を活用することで、最低限の学力を担保できるよう努力している。加えて、学科会議内で入試制度別の受け入れ人数や試験科目の見直しについて議論を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多種の入試を行うことで、多様な学生が入学する環境となっている。就職状況からも多くの卒業生が食料、環境、健康系の企業に就職しており、求める学生像に沿っていると考えられる。	【長所】 指定校を検討し見直しを行うことで、毎年、一定数の入学者を確保した。
	【特色】 生命科学に関するより高度な専門知識の習得を求めて、毎年大学院へ一定人数が進学している。	【特色】 幅広く生命科学に興味を有する学生を募集するために理科の選択科目に化学、生物、物理を設定してきた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	入試要項、大学ホームページ、就職状況一覧	入試要項

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	「設置の趣旨」に基づき、バイオサイエンス学科では、生物と化学を基盤として、個体内、さらには、細胞内の生命現象を分子機能の観点から理解する生命科学を修得させて、農学、さらには、産業に応用できる専門家を養成するための専任教員を配置することとしている。 専任教員の採用は原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等、教員に求める資質を明示している。	専任教員として、教授 9 名、准教授 3 名、助教 4 名の計 16 名とし、文部科学省の設置基準を上回っており、十分な教育・研究指導を行うことが出来る。 平成 29 年度と 30 年度は、男性教員 15 名、女性教員 2 名であったが、平成 31 年度より、男性教員 14 名、女性教員 2 名の体制。 動物、植物、細胞分子機能の 3 分野に、各 6 名ずつ教員を配置し、適切な年齢・職位バランスを考慮した採用・昇任を行っている。 担当授業は分野で均等になるように配置することで、1 教員当たり担当講義数は偏ることなく配当している。	教員人事については、学科の教授により構成される人事委員会により、以下の資料に基づき実施している。 募集・採用・昇格については、職階ごとに「東京農業大学・短期大学部における教員採用・昇格に関する条件」を定め、「研究業績得点化表」・「教育・管理業務・社会活動評価得点化表」に基づき、審査を実施。採用にあたっては、人事委員会による候補者の一次審査（書類審査、3 名程度の候補者選抜）および二次審査（面接）を実施している。新規採用者については「大学教員専任化審査判定表」を採用時に作成し、5 年目に判定表を基に専任化の判定を行う。 その後全学的な人事専門委員会と教授会にて審査が行われる。	本年度より全学的な FD 委員会に 3 名の学科教員が委員として参加。 毎年、自己教育評価を実施し、授業・研究指導・国際交流・大学運営・学外活動を評価。授業については、上記に加えて学生による授業評価を実施し、授業向上に取り組んでいる。 また、先端研究を推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であることから、原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請することとし、年度末に外部資金申請者を確認している。	平成 29 年度より動物・植物・微生物・機能性分子の 4 分野体制を動物・植物・細胞分子機能の 3 分野体制とした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 生命科学の幅広い専門分野に渡る教員の配置	【長所】 学科を構成する 3 分野にバランス良く均等な教員数を配置している。	【長所】 点数による明確な昇格目標の提示	【長所】 競争的研究資金の獲得推進	【長所】 3 分野に各 2 研究室とバランスのよい 6 研究室体制
	【特色】 生命科学の幅広い分野の人材確保	【特色】 3 分野 6 研究室に各 3 名の教員を配置。	【特色】	【特色】 競争的研究資金への申請	【特色】 複数の女性教員配置
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名	設置の趣旨（文科省提出資料）		東京農業大学・短期大学部における教員採用・昇格に関する条件、研究業績得点化表、教育・管理業務・社会活動評価得点化表、大学教員専任化審査判定表	自己教育評価 授業評価	

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
本間 和宏
農芸化学科

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	「研究活動の活性化と研究成果の発信の推進」 1) 学科の名称変更と研究内容の広報 2) 大学院進学率の増加 3) 論文・学会発表および外部研究費件数の増加
実行サイクル	___ 1 ___ 年サイクル（平成 3 0 年～3 1 年）
実施 スケジュール	1) 大学案内や学科パンフレットの内容を見直す。キャンパス見学会において「農芸化学」の理解についてのアンケート調査を行う。 2) 低学年の必修科目の中で、大学院教育・研究活動についての啓発を行う。 3) 自己点検システムへの入力を随時チェックする。科研費申請時期に注意喚起・情報交換を行う。
目標達成を測 定する指標	1) 様々な機会に学科に対する認識・理解に関するアンケートを行い、効果を評価する。 2) H30 年度実施 H31 年入試における進学者数から判断する。 3) 年度末に大学 HP の教員検索から論文・学会発表および外部研究費件数を集計する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1、2) 1 年生フレッシュマンセミナーにおいて、大学院とはどのようなところかを解説するとともに、志望動向についてアンケートを実施した。 3) 今年度末までの論文・学会発表を集計した。 論文発表 13 件、学会発表 73 件、外部研究費（新規・継続）20 件
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 若手教員が自身の大学院生活について話をする事で、大学院への興味が高まることが分かった。
	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 1 期合格 31 名（2 名が他大進学、2 名が就職のため辞退）、2 期合格 3 名、計 30 名が進学（入学手続き）。博士課程前期の定員が 30 人であるので、もう少し学力のある志願者を増やしたい。
	【課題】 大学院に興味がなかった学生に入学後に興味を持たせるのは容易ではない。受験生と新入生に対する大学院の広報にさらに力を入れる。 研究成果をマスメディアに向けて発信することを心がける。
根拠資料名	添付資料「R1 化学包括的点検評価・添付資料 1 __大学院志望アンケート」を参照。 添付資料「R1 化学包括的点検評価・添付資料 2 __研究業績」を参照。

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
本間 和宏
醸造科学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	醸造・食品メーカーと提携して、インターンシップ型の学外実習を実施することにより、醸造科学の理論と実践を総合的に理解させる。	卒業研究を通して、発酵・醸造理論の理解を深めると共に、本分野における新たな課題の発見や解決法の模索、既存技術の改良や新技術の開発に繋がる発想やスキルを修得させる。	大学院への進学者数を増やす
実行サイクル	____ 1 ____ 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	____ 1 ____ 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	____ 4 ____ 年サイクル（平成 29 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	三年次生に「醸造科学特別実習」の積極的な履修を促し、学科とメーカー間で密な連携をとることにより、令和元年 12 月の清酒仕込み時期に合わせた二週間のインターンシップ型学外実習を実施する。	三年次より研究室に所属させ、卒業研究開始前に事前のトレーニングおよび研究室生活へ適応期間を設ける。四年次に一年間（常時担当教員のサポートの下で）個別の研究テーマを主体的に遂行させることを通して、醸造科学の知識・理論の運用や解析方法を実践的・統合的に修得させる。研究結果を四年次の年度末に卒業論文として纏めさせる。	一年次のフレッシュマンセミナーや共通演習等を通して、本学科の分野における研究の魅力や大学院修了者の活躍などを学生に紹介する。二年次・三年次においては、各教員の担当科目を通じて研究の魅力を印象づける。四年次には卒業研究の過程で進学する動機付けを行なうように指導する。
目標達成を測定する指標	以下の二つの指標を併せて到達度を判定する。 実習中は毎日日誌をつけることを課題とし、実習終了後に学科に提出させる。 日誌の記載内容より学科教員が評価を行なう。 各企業の実習担当者より、実習終了時に実習態度・到達度合い等について評価をしていただく（評価報告書を学科に送付していただく）。	学生が所属する研究室教員との研究討論や発表会での内容から、研究室教員がスキルの修得状況を学生ごとに評価する。併せて卒業論文の内容を以って、総合的に到達度を判定する。	各年度の大学院進学者数により測定する。
自己評価 （ ☒ を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	令和元年 12 月 11 日（水）から 12 月 24 日（火）の二週間実施した。122 名の学生が、2～4 名のグループに分かれ、全国 29 都道府県にわたる合計 57 の企業等において実習を行なった。	4 年生 177 名全員が所属研究室において、研究室教員の指導の下、卒業論文作成のための研究を行ない、研究成果の論文化を行なった。現 4 年次生は、3 年次から研究室に所属しトレーニングを行った。	共通演習や各教員の授業・卒業研究指導を通して醸造科学分野の研究の魅力を学生に伝えた。2020 年度前期課程合格者は 25 名、後期課程合格者は 1 名であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 多くの本学科卒業生経営の企業に協力いただいております、学科と実習先の連携がスムーズに行なえている。	【長所】 最終学年において、教員と距離の近いコミュニケーションの中で、直接スキル修得ができる。	【長所】 学生に進路についての選択肢の多様性を多くの機会に直接伝えられる。
	【特色】 このような実習を成し得ているのは、全国的に見ても本学醸造科学科だけである。実学主義を体験できる。	【特色】 4 年生全員が、研究室での実験や発表会を通して主体的に学びの場に参加する。	【特色】 学科教員が多くの事例を紹介できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 前学期が就職活動期と重なる。	【問題点】 入学時の大学院進学希望率があまり高くない。
	【課題】 なし	【課題】 学生と研究室教員のコミュニケーションをよくなり、就職活動中も学生の卒業研究のモチベーションを損なわないように留意する。	【課題】 大学院進学を視野に入れた大学受験生を集める工夫が必要である。
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科共通機器の効果的運営のための基盤整備	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 30 年～令和 4 年）	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）
実施 スケジュール	ワーキンググループを立ち上げ、学科共通機器を運営するためのルールを策定する。策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	ルールを策定し、既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。	学会発表は、学科で年間 20 件以上を目標とする。 外部資金申請は、学科で年間 5 件を目標とする。 できるだけ Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	学科全体として、年間 5 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	ルールを策定し、各研究室にて積極的に利用した。また、機器操作やどの様な解析が可能かなど勉強会を開催し、学科共通機器の活用を推進した。今年度は新たに学科共通機器として購入した GC-MS/MS を研究室を横断して使用した。	論文発表数は、学科全体で 14 件 学会発表は、学科全体（6 研究室）で 18 件。 外部資金申請件数は、学科全体で 13 件。 今年度発表論文のうち、IF の高いものは 3.78、3.57 であった。	今年度の関連する公的機関や企業との共同研究数は、学科全体で 13 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 最新の機器を利用することで、新たな発見につながることを期待される。	【長所】 外部資金の獲得状況は順調と考えられる。	【長所】 各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】 これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる	【特色】 発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できている。	【特色】 学科の特色を反映した明解な連携が多い。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。	【問題点】 教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】 なし
	【課題】 勉強会などを行っていくことで、各研究室でも運用できるようになることが望ましい。	【課題】 引き続き、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】 なし
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	新年度初めに新入生に対するアンケートを実施し、本学科受験生の傾向や動向についての把握に努める。	学科として、発酵・醸造に関する（主に高校生程度の）一般向け書籍を製作し、本学科のプレゼンスの一層の向上、および受験生の認知度の向上に努める。	教務以外の場面においても、教員が積極的に学科学生との親睦に努める。
実行サイクル	2 年サイクル（平成 30 年～令和 2 年）	3 年サイクル（平成 29 年～令和 2 年）	1 年サイクル（平成 30 年～令和 2 年）
実施 スケジュール	新年度の早い段階に、フレッシュマンセミナーにおいて新 1 年生全員を対象にアンケートを実施する。アンケート結果を集計し、本学科を受験する受験生の傾向や本学科を受験するに至った経緯、より発信が望ましい情報などについて学科として検討を行なう。	平成 29 年度に作成した骨子を基に、学科教員全員が分担し 5 月末をめどに執筆する。 語句の統一等の整理を終了し、原稿を完成させる。 今年度を目処に、書籍を発行する。	前期終了時に、本学科教員主催で新入生歓迎会を開催する。 8 月末頃より、教員が手分けして醸造両科統一本部の活動をサポートし、収穫祭の成功を支援する。
目標達成を測定する指標	アンケート結果を整理してデータ化し、学科教員全員で共有する。それを、オープンキャンパスや学科 HP・大学案内等での情報発信を有効に行なう上での基礎情報として利用すること。	成山堂書店より、「東京農業大学応用生物科学部醸造科学科編」で書籍『発酵・醸造の疑問 50』を出版すること。	上記各種イベントの実施すること。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	アンケート結果を集計し、本学科を受験する受験生の傾向や本学科を受験するに至った経緯、より発信が望ましい情報などについて学科として検討を行なった。	書籍『発酵・醸造の疑問 50』を出版した。	8 月 2 日に新入生歓迎会を開催した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 入学後すぐのリサーチであり、正確に状況の把握ができています。	【長所】 本学科の扱う研究・教育分野の魅力、また本学醸造科学科を、広く一般に知ってもらえることができる。	【長所】 学科教員が協力的で、授業以外での学生と教員の距離の近い交流ができています。
	【特色】 昨年度も同様のアンケートを並行して実施しており、比較や傾向の把握を行なった。	【特色】 発酵・醸造関連の一般書として、大変読みやすく、また読者の興味を誘い易い構成となっている。	【特色】 特に新入生歓迎チーズの会は、「発酵」という学科キーワードも入れており、学科の独自色の出たものとなっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 情報全体の解析および活用に不十分な点が残っている。	【問題点】 なし	【問題点】 新入生歓迎会の開催時期が適切かについて、一部意見が出ている。
	【課題】 引き続き、情報の解析を行ない、学科運営の上で有効活用していく。	【課題】 なし	【課題】 学科教員の意見を聞いて、必要なら今後は違う時期に設定する。
根拠資料名			

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
本間 和宏
食品安全健康学科

2. 研究に関する総合的事項

	①	②
目 標	食の流通のグローバル化によって、市場には新たな食材や加工食品があふれ、人々は豊かな食文化を楽しむ一方で、在来・外来の食材が食の安全を脅かす危険から自分たちを守る必要が生じている。こうした「食の安全・安心」をはじめ「食の機能と健康」を科学的に解明する研究拠点である食品安全健康学科の教育・研究内容について、あらゆる機会を通じて広く社会に発信する。	食品安全科学分野および健康機能科学分野における研究発表、外部資金の申請を積極的に行う。
実行サイクル	1 年サイクル（平成 31 年～令和 2 年）	1 年サイクル（平成 31 年～ 令和 2 年）
実施 スケジュール	1. キャンパスツアーにおいて、学科のブースを開設し、本学科の教育・研究内容を紹介する。 2. 高校生を対象とした「夢ナビ」で、本学科の教育・研究内容を紹介する。 3. オープンキャンパスにおいて、本学科の教育・研究内容を紹介する。 4. 広く雑誌媒体等により、本学科の教育・研究内容を紹介する。 5. 雑誌・書籍などを通じて本学科教育、研究の主旨を広く伝えていく。	1. 関連学会、関連学術雑誌における発表を積極的に行う。 2. 科研費、研究財団が行っている研究助成など外部資金に積極的に応募する。 3. 企業が関心をもつようなテーマを積極的に設定し、企業からの委託研究の機会を増やす。
目標達成を測定する指標	1. 3. に関しては、参加人数により確認する。 2.に関しては、派遣教員の人数、並びに模擬講義での聴講者の人数により確認する。 4. 5 に関しては、掲載数、その媒体の販売部数により確認する。	1. 学会発表数を確認する。 2. 学会、学術雑誌発表数を確認する。 3. 外部資金への応募数を確認する。 4. 委託研究(共同研究)数を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. キャンパスツアーにおいて、ブースでの学科説明、研究室見学ツアーも行い、本学科の教育・研究内容を紹介できた（資料 1）。 2. オープンキャンパスにおいて、本学科の教育・研究内容を紹介し、2 日間とも 1000 名を越す来場者があった。 本学科について新カリキュラム説明用のチラシ及び平成 30 年度就職先詳細一覧を作成し配布した。	1. 学会発表数は、全教員で延べ 103 題であった。 2. 学術雑誌発表数は延べ 35 報であり、本学科の研究を世界的に周知した。 3. 外部資金への応募数は、全教員で 33 件であった。 4. 委託研究(共同研究)数、全教員で 27 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 本学科で行っている研究を学会および学術雑誌で積極的に発表できた。 外部資金への応募により、積極的に研究資金の獲得を意識し、学会や学術論文での発表によって、企業との委託研究（共同研究）が多くなり、自己努力により、充実した研究・研究環境を整えようと努力した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 【課題】 高校などでの模擬講義を積極的に行い、さらに当学科の周知度をあげていく必要がある。	【問題点】 【課題】

根拠資料名	資料 1 トークブース 学科別集計表	
-------	--------------------	--

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本学科のディプロマポリシーにある「食品安全健康学科は、食の安全と健康機能の専門領域における確かな知識と技術、研究能力を修得し、食の安全と健康機能上の問題解決力を身に付けている人材」であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。
実行サイクル	____1____年サイクル（平成 31 年～ 令和 2 年）
実施 スケジュール	1. 本学主催の企業懇談会に出席し、多くの企業に本学科の教育について説明する。 2. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。
目標達成を測定する指標	1. 企業懇談会で名刺交換した企業数を確認する。 2. 参加学会を確認する。 3. 問い合わせを受けた企業数を確認する
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1.本学主催の企業懇談会には、全教授が参加し、企業に当学科および当学科の学生について周知した。 2.参加学会数は、全教員で 52 件であった。 3.問い合わせを受けた企業は、全教員で 55 件であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】 本学科で行っている研究を企業懇談会および学会の懇親会・交流会で、企業関係者に PR できた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
本間 和宏
栄養科学科

2．研究に関する総合的事項

	①
目 標	管理栄養士として必須の栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の取得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	__1__年サイクル（平成 30 年～31 年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会へ参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌へ投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測定する指標	達成度を判断するための指標としては、教員の学会発表演題数、掲載論文数、外部資金への申請数などを確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	(1) 多くの教員が栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会へ参加し、24 演題を発表した。 (2) 多くの教員が栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌へ投稿し、和文 4 報、英文 9 報、計 13 報発表した。 (3) 個人もしくはグループで外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに 24 件の申請を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員が卒業研究指導を通じて研究を行い、研究成果を公表していくことは、教員及び学生双方にとって意欲の向上につながる。
	【特色】 科学的根拠に基づいた栄養管理・栄養指導が行える管理栄養士の輩出に貢献することができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	令和元年度活動報告書

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	農学と医学の領域を融合させた高度な専門的知識および技術を有し、社会に貢献できる管理栄養士を育て、病院や介護施設、食品企業、行政機関などに輩出する。
実行サイクル	1 年サイクル（平成 30 年～31 年）
実施 スケジュール	(1) 学生への意識付けのために地域・産業界・官庁等で活躍している社会人による講演を 1 年次のフレッシュマンセミナー等にて実施する。 (2) 地域・産業界・官庁等との連携をとるために、たとえば地域での健康推進事業等を積極的に推進する。
目標達成を測 定する指標	(1) 社会人による講演のレポート課題を通して学生の認識を確認する。 (2) 地域・産業界・官庁等との連携状況を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	(1) 社会人による講演を実施し、提出レポートにて管理栄養士の社会貢献への認識を確認した。 1 年生 フレッシュマンセミナー 高齢者の栄養改善に関する研究に従事する卒業生による講演「健康長寿のための食生活のすすめ」（人間総合科学大学教授 熊谷修） 3 年生 栄養科学特論 「就活に向けてのアドバイスと食品メーカーの仕事内容」（森永乳業株式会社海外事業部 吉川麻友） 「摂取マグネシウムの不足が栄養素代謝に及ぼす影響に関する研究」（ILSI Japan 寄付講座「機能性食品ゲノミクス」石島智子） 「企業における機能性素材の研究」（太陽化学株式会社 ニュートリション事業部 研究開発グループ 価値創造フロンティア研究所 小関誠） 「管理栄養士歴 12 年 栄養指導の現場で見てきたもの」（フリーランス管理栄養士 浜野美波） 「病院の管理栄養士について」（独立行政法人国立病院機構横浜医療センター統括診療部外来診療部総合内科栄養管理室 平井恵里） 「私×管理栄養士・価値を広げる思考法【スポーツ栄養の実例踏まえて】」（CO-CO training 神田光一郎） (2) 地域・産業界・官庁等との連携状況。 資料のとおり、9 件の連携を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 管理栄養士の活躍状況を知ること、自らの卒業後をイメージしやすくなり、学習意欲の向上につながる。また、教員が産学連携や地域の健康推進事業などに関わることで、社会における管理栄養士の役割を確認し、学生教育に還元することができる。
	【特色】 管理栄養士は様々な分野で活躍しているが、入学までに具体的な情報を得ることは難しい。そのため、入学当初のフレッシュマンセミナーで様々な管理栄養士像を知ることによって学ぶ意欲の向上につなげる。そして就職活動に先立って 3 年後期に具体的な活躍状況を知ること、将来の方向性を考える情報源となる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし
	【課題】 なし
根拠資料名	令和元年度活動報告書

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学部
本間 和宏
バイオサイエンス学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	教育の理念である「実学主義」に基づく体験型カリキュラムを多く取り入れた実習や実験を通して、集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う。	学科の教育上の目的である「バイオサイエンスに関する専門的な知識と技術を習得し、一つの課題に対して自立的に解決できる能力を身につけさせる」について、研究室における専門教育により達成させる。	学科全体としてのディプロマポリシーの達成状況を判断し、教育体制の改善に役立てる。
実行サイクル	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）
実施 スケジュール	実験実習（2 年次～3 年次前期）において教育指導する	研究室における専門教育の実践：3 年次前期の研究室配属後に、研究室ごとに専攻実験(専門知識・技術を習得するためのトレーニング)を行う。4 年次においては、卒業論文研究の計画発表会、中間発表会、卒論発表会を行い、達成度に応じた教育指導を行う。	ディプロマポリシーの達成度評価：研究室ごとに4 年次の卒業論文および論文発表会を審査し評価する。また、卒業時にポリシーの各項目に対する自己評価アンケート調査を行い、学科全体のポリシー達成度をモニターする。
目標達成を測定する指標	共通演習、実験実習の出席状況により判断する。	3 年次の専攻実験における出席状況と評価、および4 年次の計画発表会、中間発表会、卒論発表会の評価により、達成度の最終判定を行う。	卒業論文の評価をもって学生個人個人のポリシー達成度を判定する。また卒業時のアンケート調査結果を集計し、卒業論文の評価と併せて学科全体としてのポリシー達成状況を判断する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	実験実習（3 年生対象）において教育指導を行った。	専攻実験（一）及び（二）(3 年生対象)、卒業論文（4 年生対象）において研究指導を行った。	卒業論文（4 年生対象）において研究指導を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 実験実習は長期（約 1 年）にわたるため、同学年の集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う能力を築くには十分な時間を提供することができる。	【長所】 専攻実験（一）及び（二）は、卒業論文研究に取り掛かるための専門知識・技術を習得するためのトレーニングと位置付けられる。従って、卒業論文完成という最終ゴールまでの達成度を、個々に追跡することができる。	【長所】 卒業論文発表会と提出された論文の内容、自己評価アンケート調査により、ディプロマポリシーの達成度を個々に評価することができる。また、評価内容は改善点を明確化するための資料となる,。
	【特色】 実験実習は、「無機化学実験」、「有機化学実験」、「微生物学実験」「生化学実験」「基礎生物学実験（一）」「基礎生物学実験（二）」の 6 つからなる。それぞれの実験は学問分野や操作方法で異なる点が多く、実験を速やかに遂行するためには、特に集団内でのコミュニケーション能力や協調性を身につけていることが必要である。	【特色】 卒業論文研究を遂行するためには、能動的な行動が必要である。従って、専攻実験、卒業論文を通してアクティブ・ラーニングを実施するためには最適な科目である。	【特色】 卒業論文研究を通して、卒業後の社会人としての自覚を身につけることができる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 卒業論文研究に着手していないため、審査・評価できない学生が数名存在する。

2019（令和元）年度 包括的な点検・評価報告書

様式 2

年度への課題	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 審査・評価できない最大の理由は、引きこもり等により研究室へ行けないことによる。その原因は、近年多様化しており解決が困難になりつつある。本学健康増進センターのカウンセラーと密に情報交換することにより改善が見られている。今後も、本学健康増進センターとの連携を継続する。
根拠資料名	基礎生物学実験（二）の出席状況が分かる資料	専攻実験（一）及び（二）（3年生対象）、卒業論文（4年生対象）の評価	

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を一層推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であるため、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	学会発表や学術論文等を通して、最新の研究成果を国内外の研究コミュニティに発信する。	社会への発信力強化の一環として、一般向けの講義・講演会やネット・印刷物等を通した研究成果発信を推進する。
実行サイクル	__3__年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）	__3__年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）	__3__年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）
実施スケジュール	原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請する。	全研究室がそれぞれ国内・国外の学会や学術雑誌等で研究成果を発表することにより、的確なプレゼンテーション、さらに研究者間でのコミュニケーションにおける専門的なディスカッションを行う。	学科教員が、学内・学外で模擬講義・出張講義・講演会を実施することにより、一般向けの発信活動を行う。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツを検討・改訂することにより、メディア発信活動を行う。
目標達成を測定する指標	学科の外部資金申請者を確認する。	研究室ごとの国内学会・国外学会・学術雑誌での成果発表回数を確認する。	学内外での模擬講義・講演の回数を確認する。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	概ね、全ての教員が学内におけるプロジェクトや科学研究費補助金等の競争的研究資金に申請し、23 件の研究資金を獲得した。	概ね、学科所属の研究室が国内外の研究コミュニティで研究発表に努め、研究成果を論文として国際科学雑誌へ 28 報掲載した。 外国人研究者による授業または研究セミナーを複数回開催し、学生や教員が聴講、質疑することにより、英語によるコミュニケーションや専門的なディスカッションを行えた。 国内外において、76 件の学会発表を行った。	学科ホームページの充進を行った。 8 件の出張講義と、1 件の市民講座を実施した。 オープンキャンパス（令和元年 8 月 4 日～5 日）及び収穫祭（令和元年 11 月 1 日～3 日）において、研究内容のポスター発表、模擬講義及び特別講義を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 学科に所属する全ての研究室（研究分野）が申請できている。	【長所】 学科所属の研究室は、国内外において毎年研究発表を行っている。	【長所】 最新の研究成果を発信できている。
	【特色】 特になし	【特色】 特になし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 競争的研究資金を申請または獲得できていない教員がいる。	【問題点】 特になし（強いて挙げれば、全ての研究室が国外での発表を行えていない。）	【問題点】 特になし
	【課題】 学科教員全員が競争的研究資金の申請及び獲得を目指す。	【課題】 国外発表の数を増やす。	【課題】 学科ホームページの充進の頻度を増やすなど、新情報をなるべく早く発信できるようにする。
根拠資料名	総研管轄資料	自己点検システム	

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	進学／就職活動への円滑な導入を支援するための学科独自の体制を構築する。	生命科学分野の教育・研究を通じて、グローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換できる指導体制を構築する。	オープンキャンパス、模擬講義、出張講義、市民講座、学会基調講演などを通じて生命科学分野の研究をわかりやすく社会に発信し、高校生を中心に一般社会への科学の普及に努める。
実行サイクル	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 令和元年）
実施スケジュール	3 年次前期：卒業生による就職支援懇談会および専攻による大学院説明会の計画 3 年次後期～4 年次前期：計画の実施 4 年次後期：進路内定状況の把握、進路未定者と面談、必要に応じた対応策の策定	4 月：留学プログラムの学生への周知と応募の推奨。外国人研究者によるセミナー・討論会の企画。教員の国際学会への参加の計画。 5～1 月：計画の実施（参加は自由意志とする） 2～3 月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。	4 月：模擬講義や出張講義などの担当者および担当順を計画。 5～2 月：計画の実施 3 月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。
目標達成を測定する指標	就職支援懇談会あるいは大学院説明会への出席者数および最終進路調査の回答などを把握して判断する。	留学プログラム相談会への出席者数、外国人研究者によるセミナー・討論会への参加者数、国際学会などにおける発表回数を把握して判断する。	出張講義などの回数およびオープンキャンパス・キャンパスツアー学科ブース来場者数などを把握して判断する。
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	○バイオサイエンス学科卒業生による就職説明会を実施した。 開催日；令和 2 年 1 月 12 日 受講人数；45 人 ○株式会社アカリク三木芳夫氏による大学院進学・就職説明会を実施した。 開催日；令和元年 11 月 29 日 受講人数；3 年生全員	○学部生に協定校留学説明会への参加を促した。 ○外国人非常勤講師（Tine Jeoh 博士 UC. Davis）により大学院の授業ならびに学部生・教員の希望者を対象としてセミナーを開催した。開催日は以下のとおりである。 令和元年 6 月 24 日～令和元年 6 月 28 日 ○教員が延べ 11 回海外出張し、国際学会などで 11 回発表した。また国際科学雑誌に 28 報の論文が掲載された。	○オープンキャンパス（令和元年 8 月 4 日（日）～5 日（月）模擬講義（2 回）、特別講義（6 回））、高校への出張講義（8 回）、市民講座（1 回）を実施し、全教員がこれらに取り組んだ。 ○研究成果のプレスリリースが新聞誌面や web site に掲載され（2 回）、高校生や一般市民に広くその情報を発信した。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 「就職活動を始める前に参考になった」「研究活動と就職活動をどのように両立するか参考になった」など参加学生からは好評を得た。	【長所】 各教員がグローバルに情報発信・情報収集することが可能となり、それを学生の教育に還元できた。	【長所】 入試センターと連携して高校への出張講義を頻回行うことができた。
	【特色】 本学科の卒業生や大学院卒就活に関する有識者（キャリアセンター協力）の講話により、進学、就職、いずれにおいてもキャリア形成をイメージできるような支援を目指している。	【特色】 外部研究資金を獲得し、国際学会などへ積極的に参加したり、外国人研究者を招聘したりすることを目指している。	【特色】 教科書にある話を平易に説明するだけでなく、最新の研究成果を盛り込み、ホットな科学情報の発信を目指している。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 特になし	【問題点】 Tine Jeoh 博士のセミナーは盛会であったが、学部生の参加は少ないようであった。	【問題点】 特になし
	【課題】 特になし	【課題】 外国人によるセミナーについて学部生への周知を積極的にはかり、参加を促したい。	【課題】 特になし
根拠資料名			